

## アヘン戦争期広東知識人のキリスト教認識<sup>(1)</sup>

—梁廷枏『耶蘇教難入中国説』への考察を中心に—

朱 海燕

### はじめに

近代中国で西洋知識を紹介した書物といえば、真っ先に思い浮かぶのは魏源の『海国図志』であろう。『海国図志』は1844年に初刊の50巻本が刊行され、その後も彼は続篇を編集し、1847年に60巻本の増補版を、1852年には100巻本を完成させている。この地理書は世に出るとすぐに中国内で大きな反響を呼び、それだけでなく幕末期の日本に輸入紹介され、当時の海外事情の撰取に大きな役割を果たした。魏源はこの『海国図志』の中で有名な「夷の長技を師とし以て夷を制す」ことを主張したが、これはアヘン戦争以後の近代中国知識人の西洋諸物に対する代表的な思想になった。この『海国図志』に遅れること2年、広東の知識人梁廷枏が『海国四説』という本を編んだ。現代では梁は「アヘン戦争以前西洋について最も理解が深かった」<sup>(2)</sup>人物、と評されるほど「眼を開いて世界をみた」知識人として有名だが、当時はその知名度は広東の域を出ない一地方文人にすぎなかった。彼のこの本は魏源の『海国図志』を強く意識して書かれたもので<sup>(3)</sup>、のちに書かれた『夷氣聞記』の中で梁は、魏源の「夷の長技を師とし以て夷を制す」主張に対する「強い違和感」を露わにしている<sup>(4)</sup>。その理由は「天朝全盛之日」という当時の大清帝国への自負心と、西洋の火砲、算学などの先進技術や知識の起源を中国に求める西洋中国起源論(附会論)にもとづくもので<sup>(5)</sup>、天朝への自負

は『海国四説』でも確認できる。

『海国四説』は『耶蘇教難入中国説』（1巻）『合省国説』（3巻）『蘭崙偶説』（4巻）『粵道貢国説』（6巻）の四説からなっている。その中で最も注目されたのはアメリカを紹介した『合省国説』で、中国思想史家溝口雄三も梁を中国で西洋の民主制を前向きに紹介した最初の人物だと高く評価している<sup>(6)</sup>。本稿はこれまであまり注意を引くことのなかった『耶蘇教難入中国説』に焦点をあてる。これは『合省国説』とほぼ同じ時期に書かれたもので、その分析を通して当時の広東知識人たちのキリスト教に対する態度を知ることができるからである。

これまで『耶蘇教難入中国説』を取り上げた研究としては、趙春晨「梁廷柅的『耶蘇教難入中国説』」、李志剛「対梁廷柅『耶蘇教難入中国説』一文の試析」と郭秀文「試論梁廷柅の宗教観」を挙げることができる<sup>(7)</sup>。『耶蘇教難入中国説』をその内容に沿って要領よくまとめているのは趙春晨の研究である。趙は、梁のキリスト教認識は浅薄であるけれど、「純粹に諸義理と客觀的態度にもとづき、明朝以来の中国（嶺南を含む）の一部の反キリスト教的士大夫たちの偏激な言葉や社会で附会されていた無知の説を一概に捨てて取らなかったことは、彼の西洋の事物を研究する上での真実を求める精神を現わしている。当時においては頗る得難いものである<sup>(8)</sup>」と述べ、梁の学問的態度を評価しているが、これは筆者も同感である。香港の教会史学者の李志剛の研究は、梁廷柅が同説を執筆した際に参考した資料を種類・宗教別に整理し、その内容について聖書神学・教義神学・歴史神学の方面から神学的な検討を加えたものである<sup>(9)</sup>。郭秀文の研究はキリスト教が中国に入り難い原因、梁がキリスト教に寛容である理由を考察している。そして、梁の西洋政治制度（アメリカの大統領制とイギリスの議会制）に対する理解が深まるにつれて、彼の君臣思想など儒学思想に新しい変化が生じたとする<sup>(10)</sup>。この見解は目新しい。日本では村尾進が1980年代からいち早く『海国四説』に注目

し研究を行っている<sup>(11)</sup>。しかし残念なことに『耶蘇教難入中国説』については簡単に言及するだけにとどまっている。

本稿は上述した先行研究を踏まえつつ、梁廷枏の『耶蘇教難入中国説』から窺える彼のキリスト教に対する認識と同説の執筆を、当時の広東でのアメリカ人宣教師たちの活動と「望厦条約」の締結に関連づけて考察する。主な資料としては中華書局刊の梁廷枏著、駱驛・劉驍校点『海国四説』（1993年）と、グリック（Edward V.Gulick・董少新訳）『伯駕与中国的解放』（広西師範大学出版社、2008年）、ラジツヒ（Michael C.Lazich・尹文涓訳）『千禧年の感召—美国第一位来華新教传教士裨治文伝』（広西師範大学出版社、2008年）などの宣教師伝記、および斉思和等整理『籌辦夷務始末：道光朝』（中華書局、1964年）などを利用する<sup>(12)</sup>。

## 一 梁廷枏と『海国四説』

梁廷枏（1796～1861）<sup>(13)</sup>は字を章冉，号を藤花亭主人という。広東順徳県の人で、代々知識人を輩出した家系の生まれである。趣味が広く金石・詞章・劇曲・考証・音律などの分野の造詣が深い。科挙試験では何度も失敗し、道光十四年（1834年）38歳の時によりやく副貢になった。同年に、両広総督盧坤の提唱で広州の越華書院の中に広東海防書局が設置されると、道光十五年、梁は総編修として招かれ、翌十六年四月に『広東海防彙覧』を完成させた。彼はほぼ一人で100余巻におよぶ初稿を編纂したようだが、繁雑さを嫌ってのちに曾釗ら4人の協力を得て42巻に縮められたという。同じ頃、梁は越華書院の監院（事務管理）に任じられ、道光二〇年には学海堂の8人の学長（山長）のうちの一人名となった。道光十七年には粵海関監督の豫堃の招きで粵海関志局の総編修に就き、翌年に『粵海関志』（30巻）を完成させている。これらの資料の編纂

を通じて梁廷枏は広東の海防と清国にやってきて交易をしている諸外国の地理的位置や国情、清国との交易内容などについて多くの知識を持つようになった。両広総督鄧廷楨がアヘン政策を厳禁政策に変えると、梁はこれに協力して鄧に民衆の相互監督を図った「五隣結保」を提案し採用された。道光十九年、アヘン禁止のため林則徐が欽差大臣として広州に派遣されてくると梁はこれに協力した。林は広東の政治と軍事状況を把握するため広州入りする前に梁のところに人を遣わして広東海防書局で編纂した資料をまとめて献ずるよう依頼した。広州到着後は梁を何度も訪問し、また翌年一月両広総督を兼任して公署に移るまで梁が監院をつとめる越華書院で政務を見ていた。梁は林則徐に最も信頼された広東の知識人の一人で、道光二〇年九月に林が罷免された後も梁は彼の依頼で仏山と広州を行き来しながら当地の士紳に広州城防衛を呼び掛け、林の後任の琦善が川鼻仮条約を結んでイギリスに大幅に譲歩したときには広東の士紳とともに巡撫の怡良に琦善の弾劾を訴えた。道光二〇年九月、梁は潮州府澄海県の訓導に推薦され、翌道光二一年六月に赴任した。しかし巡撫怡良より九月には広州に戻ってほしいとの要請があり、八月末に広州に戻り、引き続き越華書院監院を務めた。その後、祁墳が琦善の後任として赴任してくると、幕僚として迎えられ、道光二八年徐広縉が両広総督になるとその幕下に入った。道光三一年に民衆を動員してイギリスの広州入城に反対したが、その活躍が評価されて内閣中書の称号を下賜された。咸豊十一年(1861年)に病気のため死去、著作38種、288巻を残している。

『海国四説』は梁廷枏が喪に服した時に書いたもので<sup>(14)</sup>、各説はそれぞれ異なる時期に完成されている。『耶蘇教難入中国説』と『合省国説』はその「序」にそれぞれ「道光二十有四年甲辰十一月朔梁廷枏自序」と「道光二十有四年秋八月晦日、広東澄海県訓導梁廷枏識」と書いてあることから、それぞれ新暦の1844年12月10日と1844年10月11日に書かれた

ことが分かる。『蘭倫偶説』は、筆者が利用した中華書局1993年版には「序」はあるけれども日付と署名がない。しかし村尾進によると京都大学図書館に所蔵されている道光二六年刊本には「道光二十五年端午序」という落款があるという<sup>(15)</sup>。だとすれば『蘭倫偶説』は1845年6月9日に完成したことになる。『粵道貢国説』は以前編纂した30巻本の『粵海関志』をコンパクトにまとめたものだが、これには序が付されていない<sup>(16)</sup>。現存の刻本に「澄海県訓導臣梁廷枏謹編」と書いた署名があることから、おそらく皇帝への献本として編まれたのだろう<sup>(17)</sup>。この四説が一冊にまとめられたのは1846年1月から2月の間である<sup>(18)</sup>。『耶蘇教難入中国説』はその巻頭に置かれている。このことは梁がキリスト教の問題を非常に重視していることを示している。

では梁は何故に『海国四説』を著したのか。序の中で彼はその理由をはっきり書き記している。その大要をまとめると以下のとおりである。

西洋の諸国の風気はただ利を図ることだけである。君民が毎回資金を出し合って、少しばかりの利益のために数万里の長い旅をし、危険で遠いことを一度も憚ったことがない。その人たちは辺鄙なところに生まれ育ち、中国から遠く、聖帝明王の修齊治平の道を見ず、詩書礼楽の身を淑<sup>よく</sup>し世を規範する理を聞いたことがない。得た内地の書籍も市商の手によるもので、彼らは儲かることだけを求め、それらの内容は一貫しておらず筋が通っていない。また禁令を恐れて購入も忙雑である。その上外国に住んでいるがためにそれを解する博識な紳士賢者もない。だから彼らの古くから行われた教えを墨守し、それを疑うことを知らないのである。

五口(港)が通商してから、彼らはもとより儲かることに専念しているが、布教も進んで行っている。信ずる心が篤ければ篤いほど宣教の意志は強い。[わが国で一筆者による補足である。以下同。]これを議論する者の中には、このことの詳しい事情を見極め、風俗人心にいかなる影響を及ぼすのではな

いかと、嘆き合う者がいる。

しかしながらこのことは心配するに足らない。彼ら（西洋人）の言うことは浅く、浅いと思索に堪えられない。資質の平凡な者でもそれを異説だと思っているから、ましてや聡明な人は尚更ではないか。彼らの為すことも虚しい。虚しいとただ人に疑惑を抱かせるだけで、日ごろ因果を講ずる者も必ずそれを空文とみなしているから、礼義を知る者は尚更だろう。その教主が行った様々な奇能異蹟は仮にそれが嘘ではないとしても、中国の道士類の幻術にすぎない。

周の文王・孔子の道を外国人に施すのはもともと伝送は速やかなのだ。以前は西海の外にあって旅行が阻まれていたから、彼らが従容として帰化し状況が緩むのを待つしかなかった。しかし、最近皇上が天地の仁を広げて格別に恩を施し、彼らが典籍を購入し、中国の読書人を招くことを任せた。大地が同文になることはここから始まる。彼らが書籍を読んで聖君・賢臣・孝子・悌弟・義夫・節婦のことを悉く知り、これを学習して愚蒙を啓発し、周の文王・孔子の道に憧れるようになれば、思い悔やみ旧教を棄てさせることは、旦暮にしてできる。そして彼らが聖教に浸るようにすると、これを機会に彼らを統制することができる。またどうして人心・風俗の害となることがあるだろうか<sup>(19)</sup>。

要するに、梁廷枏はキリスト教を中国文化への脅威とはみなさず、皇帝が中国典籍の購入などを許したことを中国の聖教でいつて教化する良いチャンスだと捉えていたのである。外国人の中国典籍の購入などはそれまでずっと禁じられていたが、これを初めて許したのは「望厦条約」においてである。このことから梁廷枏のこの序は同年7月に締結された中米「望厦条約」を強く意識して書いたことが分かる。

## 二 『耶蘇教難入中国説』からみる 梁廷枏のキリスト教認識

『耶蘇教難入中国説』は序と本論からなっている。序は全体の内容をコンパクトにまとめたものである。序は最初にキリスト教が西洋で広まった理由について述べている。その大要は以下のとおりである。

耶蘇[教]はその教えを近くの諸国に久しく行うことができた。「鐸徳」(Sacerdos, 司祭)は四方に信者を派遣してつぎつぎに入信を勧誘する。彼らはずは言葉を以って勧誘し、入らないときには利益を以って誘惑し、それでも入らないとついに脅しにかかる。そうして西洋の百数国がみなその影響下に置かれることになった。

討伐や殺しを好むところに耶蘇が生まれ一説を創り、その地に未曾有のことを開いた。またその門徒弟子といっしょに人々の強い意志を励まし、長い距離の危険な旅を恐れず諸国を遊歴し、至るところにその教えを広めた。その教えは人々が共に尊敬する天(「天体」)をもつぱら取り上げ、人々に反省させ天を尊崇するようにさせた。そしてその教えをもって倫常日用とし、持斎と殺戮を戒める規範とした。そして地獄天堂の説と死後に復活審判があることを教え、信仰心を堅くした<sup>(20)</sup>。

そのあと梁はキリスト教に対して抱いた幾つかの疑問を提示しているが、それらは明清時の儒学者がキリスト教の教義に疑問を抱き解釈したときに繰り返し出てくる主張とかなり似ている。例えば仏教の趣旨と似ていること、イエスの神通力や神性に対する疑問、復活審判の説を設けた理由などである<sup>(21)</sup>。そして最後に「近ごろ広く通商をあたえ、市場は広くなり、布教を行う者は険しい処にも遠くから来るようになった。し

かし自分でその福を求めるだけなら民害にはならない。夷人が自ら一つの宗教をもつのを聴<sup>ゆる</sup>すのもまた遠来の者を懐柔<sup>おしえ</sup>するの義を昭らかにすることである。[中略] 彼らの[キリスト教の] 宙に浮いた暫定的な、その善とする所を善とする話は、いま西洋において盛んであるが、もしいつか中国の聖教が[西洋を] 被ったならば、識見は日に開け、必ずや江心(長江域)の味を弁じ冀北(河北)を思う人があるように、わきまえて中国聖教を思い願う人々が有るだろう」<sup>(22)</sup>、と述べるのである。すなわち、梁廷枏は懐柔と中国聖教への教化の観点から、「その自存<sup>ゆる</sup>を聴」したのであった。

このように序でキリスト教に対するその態度を再度表明してから、梁は本論でキリスト教について詳細に紹介し、最後にキリスト教が中国に入り難い理由について述べている。まず、キリスト教についての記述を見てみる。

キリスト教の起源について。天堂地獄の説からみるとそれは仏教の六道輪廻の宗旨と合致しているが、キリスト教を信じている西洋人は仏法を異端として斥け、攻撃するに余力を残さない。耶蘇という者を尊んで天主と呼び、その教もまた天主教という。ヨーロッパ人がこの教を重んじた歴史は長いが、しかしその信仰が初めて盛んになるのは明の嘉靖年間である。天主教の始まりを遡ると、それはモーセに由来する。耶蘇が出た後に初めて天主教に変わり、それから次第に変化した。『古経』という『古遺詔書』は耶蘇が生まれる以前の時事が書かれ、『新経』という『新遺詔書』はユダの民が本国に戻ったとき、士師が再び啓示を受け耶蘇が世界を救うことが予言されている。この両書を尊んで『聖書』といい、『真経』と叫んでいる<sup>(23)</sup>。このような感じで『聖書』『歴史』『宝訓』『詩書』および明末以後の来華宣教師によって書かれた『四字経』などの著作を紹介したのち、梁は彼が見た外国の本と市場などで配布されていた伝道書に書かれている『聖書』の引用部分、以前から中国語で書き残

された諸書を利用してキリスト教の概要を整理している<sup>(24)</sup>。それは神が六日で世界を創った話と三位一体についての説明から始まり、アダムとイブが禁断の実を食べて楽園を追われたことから血筋に沿って61代孫とされるバプテスマのヨハネまでを順を追って記している<sup>(25)</sup>。それからモーセと十戒、ユダ国の地理的位置、処女懐胎、イエスの誕生とその布教、12人の弟子、山上での垂訓、イエスの死と復活を詳細に紹介し、『聖号経』『天主経』など残された經典と、 sacrament（「七蹟」）、至福の教え（「八真福」）、三つの仇（悪魔、肉身、世俗のこと）、後世の人が定めた4つの会規、四福音書、使徒による布教活動、復活と審判を詳述している<sup>(26)</sup>。そのあとに唐の景教、ゾロアスター教、マニ教を取り上げ、その関係を考察しているが、「マニ教はイスラム教と根源が同じであり、そしてイスラム教は景教と根源が同じである」。これらは「いずれも耶蘇教から来たようで、[今も]なお耶蘇教と相混ざっている[ところがある]」ため、「一つ一つその端緒を明らかにすることができない」という<sup>(27)</sup>。このように梁はキリスト教の起源と歴史、その教義についてかなり全面的に紹介している。

李志剛によると、梁の利用した資料は多岐にわたっている。キリスト教に関するものだけ挙げるが、カトリックについては『古経』、『真経』、『四字経』、『聖母経』、『諸経解』、『会中規』、『天同略』、『解信経問答』、『聖録』、『信経』、『十字経』、『天主経』、『四会規』などを、プロテスタントについては『古遺詔書』、『新遺詔書』、『聖書』、『詩書』、『東西洋考毎月統記伝』、『澳門月報』、『行論要略』などを参考にしたとする<sup>(28)</sup>。しかし、『聖書』『詩書』など一部は書名に触れているだけで、実際に読んだわけではないようである<sup>(29)</sup>。

これらの記述を踏まえて、梁は次のように総論を展開する。キリスト教のいう天国と地獄は仏教と宗旨が同じである。その善に福を与え淫に禍を与える説は、すなわち儒家のいう善行には祥を降し、不善には殃を

降すという理である。ただ、仏教が寂滅を尊び、意として清修を主とするのに対し、キリスト教の信徒は人に入信するように勧め、礼拝をし、奉誦をする。これは仏教のいう寂滅・清修からは程遠い。とはいえキリスト教の布教に対する心跡はまた仏教と大同小異といえよう<sup>(30)</sup>。しかし、キリスト教は儒教の教えと以下のような違いがあるために中国で流行し難いという<sup>(31)</sup>。

その一。仏教は「輪廻受生」を賞罰の結果であり善悪の出口であるとする。しかし儒学者はこの考えを道から外れたもの（「不道」）として退ける。同じく、キリスト教の天国と地獄と復活審判の説も儒教の道から外れたものであり、疑問に思う点が多い。人が死ぬと至善至悪の者が天国や地獄に行くほか、その他の死者はこの世と併存するという。これまで数千万億の鬼でもなく仙でもない靈魂がいるはずだが、宇宙にいったいどこにそんなに広い場所があってこれらの靈魂を収容できるのか。また、それらの靈魂は貴賤親疎を揃えて同じくするのか、それともその中でもまた等級をつけて区別するのか。それらは毎日一緒に住み何もしないでいるのか、それともそれぞれに神通力を与えて仕事に従事させるのか。生前父子・兄弟・夫婦・朋友だった者は逢っても相知らぬのか、それとも生前のようにその関係によって集まるのか。君と父は至尊である。以前その臣と子だった者が君と父も知らぬなら、その魂はそれでも霊と謂えるのだろうか<sup>(32)</sup>。

その二。審判はいつ下るのか。イエスから現在まですでに数千年が経った。どうして一度も審判を行わないのか。現在まで数えきれない人が死に、審判を待っているが、審判が行われるまでこれらの死者はどこに安置されるのか。またすべての死者を同時に審判するというが、果たしてそれが可能なのだろうか<sup>(33)</sup>。

その三。「十戒」の中では親孝行はよく扶養することに止まり、勧めて入信させないことを親不孝とする。また、一夫一婦制をとり、跡取り

がなくても妾を娶ることができないとしている<sup>(34)</sup>。

その四。善悪応報・天地・祭祀・鬼神に対する考えが違う。第一、中国の賞罰とその基準が違う。中国では君子は賞され、小人は罰せられる。親不孝の子は雷に打たれる。また、風や雹・水や火・疫・地震などは、ややもすれば百万生霊を殺すが、これには事後の救済はあっても事前の防止はない。これまた聖道・治化の外にあるものである。その賞善罰悪が当たるか当たらないかは天道が司る。第二、天地は大きく聖人でも知らないことがある。これは造物の測ることができないことに帰される。また六合<sup>せかい</sup>の外<sup>の外</sup>のことは聖人は存して論じず、六合の内<sup>しん</sup>のことは聖人は論じても議しない。それ故、陰陽の測り知れぬものを神とよぶ。王は天明地察に仕えるのみで、王のみ天を祭ることができる。第三、祀るのは日月・風雲・雷雨など農作を助ける神祇、貢献のある帝王大臣・民、国家のために身を捧げた者などであり、これは一人が私禱し媚へつらい、その福を乞うこととは異なるのである。第四、死者について。死ぬと魂は天に上り魄は地に降る。子孫が祭祀を行うときだけ魂魄が集まるのだが、それが終わるとまた散る。祭祀を行ってくれる人がない者は凶暴な鬼(「厲」)になるから国家がそれらの者のための祭祀を行うのである<sup>(35)</sup>。

このように梁が最終的に着目したのはキリスト教と中国の宗教や習慣との違いであり、これらの違いと儒教への自負にもとづいてキリスト教は中国に入り難いと結論づけている。

梁廷柎のキリスト教への理解は常に仏教との比較を通して行われていたのだが、それらの記述を読む限り、彼はキリスト教を仏教よりも肯定的に見ている。たとえば、「西海諸国」で古からの仏教を棄ててキリスト教に改宗する者がいることについて、空を教え父母妻子を棄てさせる仏教よりも天を尊ぶことを教えるキリスト教のほうがより人を安心させ、復活審判の説も禍を免れ福を求める人の心理に合致しているとい

う<sup>(36)</sup>。だから教義的に似ている仏教を西洋人が異端として激しく攻撃することを頗る不思議に思っている。そこで彼は仏教への批判について次のように説明している。すなわち、僧と尼は子孫をつくらず労働せずに食すなどと言うが、民と同じく法を犯すと罰せられるからそのままほうっておいても良い。いきなり数千万人を村落に移住させ落ち着かせるのはたいへん面倒なことである。身寄りのない老人、精神病にかかった人、孤児の面倒を見る所はその経費はみな政府から賄われるが、僧と尼だけはすべての出費を布施によって賄っている。そのうえ近年田租などで自食する者が多いから、公にとって害がない。また、パスパ、ツォンカバなど(チベット仏教)は同じ宗教の異なる派閥であり内地の仏教とは違う。西域では僧を懐柔することはすなわち辺境の安定にかかわる大事である。士大夫の中では晩年に仏門に入る者が多いが、これはよく理解できる。若い時に奢侈を極めたから仏門に入って清浄に帰るためであり、本当に僧になるわけではない。そして周公・孔子の教えは日月のように長く衰えず生命力が旺盛であるから仏教がそれにとって代わることはない、と<sup>(37)</sup>。

では、梁廷枏のいう耶蘇教とは何を指しているのか。梁のキリスト教に関する記述はイエスまでとしており、その後の宗教改革やプロテスタントのローマ・カトリックからの分離には触れていない。彼のいう耶蘇教はあいまいであり、キリスト教が誕生する以前のユダヤ教を指すときもあれば、初期のキリスト教や中世のカトリック、プロテスタントを指すときもある。『海国四説』全巻からみると、初期のキリスト教や中世までのカトリックについては「耶蘇教」「天主教」の二つの表記が見られ、ヨーロッパ諸国についていうときは「耶蘇天主教」と記している<sup>(38)</sup>。そしてカトリックとプロテスタントについては、『蘭倫偶説』巻3でアメリカへの植民を述べるとき「[明]天啓元年、すなわち西国の1621年、イギリスは民にみな波羅特士頓教(プロテスタント)を奉じることを命

じ、それまで奉じてきた額加(?)と加特力(カトリック)の二教を禁じた。民は懼れて国外に退避した。[中略]そして200余りの人が一緒にここに移民し、[中略]地名を馬沙諸些(マサチューセッツ)に変えた」<sup>(39)</sup>とあるから、両者を区別していることは確かだが、両者の違いをどこまで理解しているのかを把握するのは難しい。また、スコットランドのメアリー女王についての記述の中で「国人を強く押さえつけ耶蘇[教]を棄て天主旧教を改めて信奉するよう求めた」<sup>(40)</sup>とあるようにごちゃ混ぜになっているところもある。

『海国四説』の一つの特徴は謹厳な学術態度である。これは随所で確認できる。上記のイギリスのカトリック禁止について書いているところも、梁は魏源の誤った記述を鵜呑みにせず、ブリッジマン『美理哥合省国志略』と当時中国人が外国を論じた陳倫炯『海国聞見録』や葉鍾進『英吉利国夷情記略』と照らし合わせながら記述している。キリスト教についても以前から巷で囁かれた荒唐無稽な説を取らず、あくまで学術的な営みから接近している。これは魏源の『海国図志』と鮮明な対比をなしている。魏源は1852年の100巻本の中で初めてキリスト教のために専論を設け、第27巻を「天主教考」としている。その中で彼は『澳門紀略』、楊光先『破邪集』、姚瑩『瀛環志略』をはじめキリスト教を論じた漢文著作の関連部分を摘録したのち、天主教について考察している。その最後に彼は小文字で中仏黃埔条約によって天主教弛禁令が出された後の様子を記しているが、そこには入信すると薬と金を3回受領できるとか、その薬を飲むと家に帰って祖先の神主を投げ捨てる、病死した信者の目をえぐり取り鉛と煎じて銀をつくっているなどの噂話が真実のように書き留められている<sup>(41)</sup>。魏源のキリスト教に対するスタンスは批判的で、「天主教考」の構成もこの趣旨に合わせたものとなっている。全体の中でキリスト教の歴史や重要な教義に触れた部分は僅かで、そこからキリスト教を理解するのは難しい。これも大半の紙幅をキリスト教

に対する説明にあてた梁とは違っている。梁の『海国四説』は『海国図志』100巻本より6年早く刊行されていたから魏源が100巻本の中で梁の『耶蘇教難入中国説』に触れてもおかしくないのだが、全く言及されていない。「広く集める」ことで評判のある魏源が言及していないということは、梁のスタンスが魏源の執筆趣旨と合致しなかったからか、あるいは魏源が知るほど広く認知されていなかったためかもしれない<sup>(42)</sup>。

以上のとおり、梁廷枏のキリスト教理解にはキリスト教に対する強い反感や嫌悪感が見られず、比較的寛容だったといえよう。この理由について趙春晨は、キリスト教への警戒心が少なく儒教文化に対する優越感が非常に強かったことと、早い時期の著作でまだその後のキリスト教の蔓延と各地で教案(反キリスト教事件)が発生した状況を見ることがなかったから、このような「泰然として処する」態度をとることができたとする<sup>(43)</sup>。最近の郭秀文はこれに次の2点を加えている。一つは、明末のイエズス会士以来の来華キリスト教宣教師たちが中国で行ってきた儒教文化を敬い仏教・イスラム教を排斥した宣伝があったこと、梁にキリスト教は取るに値すると思わせたのはこの宣教師たちによる宣伝の影響が大きいという<sup>(44)</sup>。第二は、広東ならではの歴史と文化である。郭によると、広東はキリスト教を受け入れた歴史が比較的長く、マカオは極東における最初の宣教拠点だった。だからキリスト教の理解に有利な条件が備わっていた。禁教時代、マカオは内地の信徒が入信するために訪れる場所であり、『澳門紀略』の著者の一人である張汝霖は、広東各県からマカオを訪れる者が後を絶たず、中でも梁の出身地である順徳の紫泥の人が最も多かったという<sup>(45)</sup>。また広東の人たちは異質文化に寛容であり、梁の前にも広東の知識人層はキリスト教に対して寛容な人が主流を占めていた、という<sup>(46)</sup>。これらはともに説得力があり、地理的位置と文化的な側面から梁のキリスト教に対する態度が温和であった一面を言い当てている。

前述したように、梁の『耶蘇教難入中国説』は「望厦条約」の締結を受けての産物で、彼の執筆動機とこうした主張を理解するためには広州における外国宣教師の活動とその影響、「望厦条約」についても検討する必要がある。次節では「望厦条約」の締結とキリスト教に関する条項がどのように条約に盛り込まれたかを中心に見ることとする。

### 三 「望厦条約」とキリスト教

#### 1. アメリカ人宣教師の来華と彼らの活動

「望厦条約」はアメリカの全権公使カッシングと両広総督耆英の間で結ばれたものだが、この条約の締結において重要な役割を果たしたのはプロテスタント宣教師のP.パーカーとE.ブリッジマンである。

周知のように清朝中国は典札問題以後キリスト教の布教を制限し、アヘン戦争の前はキリスト教の布教は禁止されていた。西洋諸国との貿易も広東1カ所に限定され、外国人は貿易シーズン中の広東商館とマカオを除いて中国で居住することが許されなかった。最初の来華プロテスタント宣教師ロバート・モリソン (Robert Morrison, 1782-1834) が1807年ロンドン伝道会<sup>ミッショナリー</sup>より広州に派遣されて来たとき、布教活動に極めて不利な状況だった。中国との貿易を独占していたイギリス東インド会社が清朝政府を怒らせることを恐れて彼の布教活動を警戒していたことと、マカオを管轄するポルトガル人がプロテスタント宣教師を排斥し敵視したため、モリソンは宣教活動はおろか中国で長期的に滞在することさえ困難となっていた。その後、東インド会社の通訳になって中国での居住問題を解決した彼はイギリス本国とともにアメリカの教会に宣教師を派遣するよう要請した。そこで、1829年にアメリカン・ボード (American Board of Commissioners for Foreign Missions) からE.ブリッジマン (Elijah Coleman Bridgman, 1801-1861) が<sup>5</sup>、アメリカ

海員友の会 (American Seaman's Friend Society) からアビール (David Abeel, 1804-1846) が派遣されて来た<sup>(47)</sup>。教会史研究者ラトゥレットは、アメリカの外国宣教は初めからイギリスの宣教活動と密接にかかわっていたと述べている<sup>(48)</sup>。

ブリッジマンは1930年2月に広州に到着後、モリソンの手配で中国語 (広東語) の学習に励むとともに、モリソンやアビールとともにクリスチャンユニオン (Christian Union in China) を組織して中国語での書籍の出版などを行った。そして1832年からは *Chinese Repository* の編集出版をはじめた。1833年にアメリカン・ボードから印刷工のウィリアムズ (S. Wells Williams, 1812-1884) が派遣されて、印刷機を携えて来華し、*Chinese Repository* の編集作業を手伝った。1834年10月にはブリッジマンの医療伝道の要請に応じて医療伝道師のP.パーカー (Peter Parker, 1804-1888) が広州に到着した。医療伝道師の派遣は直接伝道が難しい中国において医療活動を通じて伝道の壁を低くすることが目的であったが、広州やインドなど気候が悪い異国の地で健康を蝕まれている宣教師たちをケアするためでもあった。パーカーはしばらくシンガポールで滞在した後マカオに戻り、オリファント商会 (Olyphant & co. 中国名は同孚洋行) の創立者オリファント (Davitt Olyphant) が老浩官 (伍秉鑑、怡和行の2代目の責任者で広東十三行の首席行商) から廉価で借りた屋敷で眼科医院を開業し医療活動を始めた。この眼科医院は無料で診療を行ったために疑心暗鬼する中国人に警戒され最初こそ患者が少なかったものの、その後すぐ門前市をなす繁盛ぶりになった。

アメリカ人宣教師が中国に派遣された時はちょうどアヘン戦争の前夜でイギリス東インド会社の中国貿易独占権が廃止され、新しい貿易規定の制定をめぐる中英関係がギクシャクしていた時期だった。1833年にイギリス議会で中国貿易独占権が廃止された後、新たな貿易規定を結ぶために1834年イギリス政府は海軍出身のネイピア (William John

Napier, 1786-1834) を駐清国貿易首席監督官(国家官員)として派遣した。同年7月中国に到着した後、ネイピアはそれまでの東インド会社貿易の慣例を無視し、許可なくマカオから広州に入り、行商を介さずに直接両広総督に公式書簡を渡した。これらの一連の行動は当時の両広総督盧坤の怒りを買ひ、盧によってイギリスの貿易特権が一時的に全面禁止され、ネイピアも広州を離れることを要求された。この時、激怒したネイピアは盧を譴責する中文声明を張り出し、また威嚇するために護衛軍艦を黄埔に呼び寄せ武力示威を行い、中英の間で短い砲撃戦が交わされた。この時、モリソンはネイピアの中文秘書兼通訳官だったが、ネイピアに随従し広州入りしてまもなく8月1日に病気のため広州で死去した。ネイピアの起こした騒動は、イギリスは「儲け主義一点張りである(唯利是図)」「人性が冷たくて残忍である(人性刻忍)」という印象を当時の中国人に与えた。

一方、このようなイギリスへの態度とは対照的に広東の士紳たちはアメリカに対しては好印象を持っていた。実はこの時期、イギリスとアメリカは対清外交においてそれぞれ異なった政策を取っていた。イギリスはこの時期すでに三角貿易を成立させていて、イギリスの産業革命は清国とのアヘン貿易によって支えられていたといわれるほど、イギリスにとってアヘン貿易は重要で、イギリスは戦争も辞さず清国との貿易を拡大し、アヘン貿易の合法化を強く求めた。片やアメリカは1818-1833年のアメリカ人对清貿易輸出総額を見た場合、アヘンが占める割合は総輸出額の5%にすぎず、中米貿易がアメリカの対外貿易総額の中で占める割合は4%強にとどまっていた<sup>(49)</sup>。また、アヘン貿易についても清教徒的<sup>ピューリタン</sup>だったアメリカではメリットよりデメリットのほうが大きいという声が強くなり、そのためアメリカ政府もアヘン貿易を否定し、イギリスの対清政策とはっきり区別をつけ、友好的な関係を維持することで清国との貿易でさらに有利な条件を引き出すことを目指した。のちに「望厦条約」の

中でもアヘン貿易の禁止を項目として盛り込んだ<sup>(50)</sup>。

清朝側もイギリスとアメリカを区別して待遇し、アメリカ人は「恭順」である印象を抱いていた<sup>(51)</sup>。アヘン戦争中の1842年に中国に派遣された海軍司令ローレンス・カーニー (Lawrence Kearny, 1789-1868) の振舞いはこのようなアメリカへの好印象を強めた。カーニーの任務は広東におけるアメリカ商人の利益を保護することとアメリカ人や他国人がアメリカ国旗を掲げてアヘンを密輸するのを取り締まることだった。中国に到着した後、カーニーは真っ先にアメリカ駐マカオ副領事デラノ (Warren Delano Jr) に、「アメリカ国旗を掲げて中国沿海で中国の法律に違反するアヘン密輸をしてはならない」「この通知の後、いかなるアメリカ船であれ、不法貿易をして中国に捕獲された場合、私の支援や仲介を得ることは決してない」<sup>(52)</sup> ことを通知した。この公告を見て両広総督祁項は、「米夷のこの行為はたいへん尊敬に値する。また頗る恭順である」と賞賛を惜しなかった<sup>(53)</sup>。

このような清朝側の態度は梁廷枏の『海国四説』からも見出せる。梁はイギリスについては「その人性は冷たくて残忍であり、広東にきた散商(地方商人)は昔の[東インド]会社の大班ターバン(代表)のように国の命令を受けている者に比べられない。[中略][兵の]最も凶暴な者は夜静かになって人々が熟睡するのを待って岸に上がって発砲する」と酷評しているが、アメリカについては「[中国に来て通商をして]数十年來恭順であり、市官かんとくかんを設けなくても強情で不遜になっていない」と称えている<sup>(54)</sup>。アヘン禁止のために派遣された林則徐は広州到着後、数度にわたりアメリカ人宣教師や商人と接触し、アヘン禁止に関する意見や協力を求めたのだが、背景には上述のようなアメリカに対する認識があったからである。

林則徐は広州滞在期間、ブリッジマンやパーカー、キング (Mr. King, 金查理) と接触していた。キングはオリファント商会の株主の一人であ

る。オリファント商会の創立者オリファント（米人）はアヘン貿易に批判的な人物で、広州での布教活動を支援した熱心なクリスチャンであった。早くからアヘン貿易に注目し、*Chinese Repository*に数多くの批判する文章を書いたブリッジマンはキングとともに6月に行われた虎門でのアヘン焼却の場に居合わせており、それを見届けている<sup>(55)</sup>。そのとき、彼らは林則徐に会った。ブリッジマンによると、林則徐は彼らにイギリス人が港から撤退した理由を尋ね、またイギリス女王や他のヨーロッパの国家指導者と相談してアヘン禁止についての彼らの支持を取りつける最適の方法について聞き、またヨーロッパの地図と地理、その他の外国の本とりわけモリソン編纂の辞書を入手したいと言った<sup>(56)</sup>。また、林はマカオにいたブリッジマンにイギリス女王宛ての書簡をエリオット船長に渡すよう頼んだこともあった<sup>(57)</sup>。ブリッジマンが虎門を離れるまで書簡が準備できず、依頼を果たすことはできなかったが、ブリッジマンは*Chinese Repository*の5月号に林則徐のイギリス女王宛ての書簡の英訳を掲載し、翌年2月号には皇帝が殊批した後の書簡を載せている<sup>(58)</sup>。パーカーもこの女王宛の手紙の英訳を手伝っている（後述）。では、林はなぜ相談相手としてブリッジマンらを選んだのだろうか。実は、当時林則徐は外国事情が分かり英語ができる何人かの中国人を雇っていたが、その中に10歳ごろからブリッジマンと一緒に生活しながらその教育を受けてきた梁発の息子梁進徳と林阿適という人物がいたのである<sup>(59)</sup>。この2人が林にブリッジマンを紹介した可能性が高い<sup>(60)</sup>。当時、林則徐は梁進徳らにブリッジマンら外国人が出版した新聞や雑誌などの刊行物を集めて翻訳させていたので、それらを通じてブリッジマンらがアヘン貿易に批判的であることを知り、比較的信用できると思ったのだろう。

同じごろ、林則徐はパーカーとも接触している。1839年6月パーカーは林則徐が派遣した3人の密使に会っている。その時、彼はそのうちの一人の要望に答えて地図集1冊と地理書1部、地球儀1つを贈ってい

る。その後も林は人を派遣してパーカーにアヘン吸引者の治療方法を聞き、また疝気（脱腸ヘルニア）の治療方法についても聞いている。パーカーによると、林は当時ヘルニアを患っていた。林本人は病院を訪れることがなかったが、部下や兄弟など何人か同じ病気を患っていた人をパーカーのところに送って治療を受けさせ、のちに治療効果があらわれると、治療に使用するヘルニアバンドを借りていった。林はパーカーの第6565号患者となった<sup>(61)</sup>。このほかにも、パーカーにエメリッヒ・ド・ヴァッテル (Emmerich de Vattel) の『国際法』(*Law of Nations*, 1758年刊)の戦争や国際関係に関する部分の中国語訳とピクトリア女王に送る書簡の英訳を彼に頼んでいる<sup>(62)</sup>。パーカーの場合、医者だったから広東官僚の間でも評判がよかった。これらのことは、広東士紳と在粵アメリカ人とりわけ宣教師との関係は概ね友好であり、アヘン問題において彼らを比較的信用していたことを示していよう。梁廷枏もそうした雰囲気の中にいた。

## 2. 「望厦条約」とその第17, 18条について

南京条約が締結された後、1843年末アメリカ政府は清朝と通商条約を結ぶため、マサチューセッツ出身の元下院議員で、下院外交委員会委員だったカッシング (Caleb Cushing) を全権公使として中国に派遣した。カッシングは出発前に国務長官ダニエル・ウェブスター (Daniel Webster) から訓令を受け、イギリスと同等の権利を獲得すること、可能ならば上京して皇帝に謁見すること、アヘン密輸についてアメリカ政府はアメリカ人がアヘン密輸にかかわることを支持しないし、これに従事して拿捕されたアメリカ人商人については清国の処置に任せること、使節団の使命は平和的であること、最恵国待遇を取得することなどを命じられた<sup>(63)</sup>。もちろん訓令の中には清朝の尊厳を傷つけないこと、アメリカの宗教的な尊厳を守ることも要求された。カッシング使節団は

1844年2月にマカオに到着した。清朝は南京条約に関わった耆英を広州に派遣して交渉に当たらせた。耆英は6月に広州に到着、同月17日にマカオの望厦村の観音廟に入った。翌日カッシングは耆英をアメリカの艦船に誘って丁寧にもてなし、翌6月19日には耆英がアメリカ使節団を接待した。その夜、耆英はカッシングの秘書フレッチャー・ウェブスター (Daniel Fletcher Webster) とパーカー、ブリッジマン、布政使黄恩彤、元肇慶府知府趙長齡、候補道員潘仕成に交渉の日程を計画することを命じた。このとき、パーカーはカッシングの中文秘書を務めており、ブリッジマンもこれを手伝っていた。6月21日、ウェブスター、パーカー、ブリッジマンは47条からなる草案を清朝側に提示した。耆英側も対応草案を提示したが、交渉はおおむねカッシング側が提示した草案に沿って行われたようだ。その後修正を経て1844年7月3日に「中米五口貿易章程三十四条」が締結された。この条約によってアメリカはイギリスと同じく開港場における通商権利を手に入れただけでなく、新たに治外法権、片務的な最恵国待遇などの権利をも獲得した。この「三十四条」の中に、次記の開港場における教会堂の設置や中国語の学習や中国書籍の購入を認める条項も盛り込まれたのだった。

第十七条 合衆国民が五港で貿易あるいは長期滞在あるいは短期滞  
在する際、民房を租賃したりあるいは自ら建物を建てたりするこ  
とを許可する。また医館、礼拝堂および墓地を設置することを許可す  
る。〔後略〕

第十八条 合衆国民が中国の各地の士民を招聘して各地の言葉を教  
わり習い且つ訴訟を助けることを許可する。招聘する者がいかなる  
人であれ中国の地方官民はこれを妨害したりまたは危害を加えたり  
などしてはならない。かつ中国の各項の書籍を購入することを許可  
する<sup>(64)</sup>。

ブリッジマンの伝記を書いたラジヒ (Lazich) は、この2条はブリッ

ジマンとパーカーによって条約の中に盛り込まれ、カッシングもこれに同意したとする<sup>(65)</sup>。しかし、パーカーの日記を読むと、「草案の中に潘仕成大人がみずから付加条款を提起し、我々に各開港場で墓地、医院と教会堂を建てる権利を与えてくれた」<sup>(66)</sup>とある。すなわち意外にも教会堂の設置を提案したのは宣教師ではなく潘仕成だというのである。

潘仕成(1804-1874?)は広州では名の知れた洋商、塩商人であり、科挙試験参加中に行った救済活動が評価され皇帝から挙人の称号を下賜された人物である<sup>(67)</sup>。広州の郊外に海山仙館という広州随一の名園を所有しており、外国について詳しいためにアヘン戦争が始まった頃から清朝の対外事務の顧問をつとめ、大金を寄付して軍艦や水雷を製造したり、地方官吏を助けて外交活動を行ったりした。1843年には賞与官職としては異例の布政使(従二品)の肩書を贈られ、望厦条約の交渉には耆英の推薦で在籍候補道員の身分でかわり、同年12月に締結された中仏黄埔条約の交渉にも参加している。耆英の推薦理由をみると、ブリッジマンとパーカーは知っている漢字が少なく、また広東語しか話せないため、アメリカとの交渉では広東語ができてアメリカ商人の中に知り合いが多い潘仕成の力が必要だったとしている<sup>(68)</sup>。パーカーによると、清朝側の交渉メンバーは趙長齡を除いてみな自分と知り合いで、耆英は彼の患者であったし、黄恩彤も個人的に仲がよく、潘仕成も仲のいい友人で、潘の両親は長い間彼の病院で世話になったという<sup>(69)</sup>。これによりパーカーは彼の医療活動を通してこれら広東の有力官僚たちとすでに親しい関係になっていたことがわかる。

では、潘は何故このような提案をしたのだろうか。パーカーは1872年イエール大学神学院成立50周年の記念講演でこのことに触れ、潘の両親を治療したことがあり、潘はこの提案が自分を喜ばせることを知っていたという<sup>(70)</sup>。パーカーによると潘の父の病気がとりわけ重かったようである。つまり、この提案は両親の病気を直してくれたパーカーへの恩

返しだったわけである。当時パーカーの病院では布教用のパンフレットが配布されたり礼拝をしたりし、梁発が短期ではあるが伝道員として働いたりしていたので、パーカーの来華目的が伝道であることを潘はよく知っていたはずである。また国益に関わる大事な条約交渉の場で個人の恩返しのために恣意的に相手国の交渉員が望む条項を付け加えるなどありえないと思うかもしれないが、公的領域と私的領域が完全に分離されていない清朝ではこのようなことが時折起こる。そこには恩返しだけではなくパーカーのようなすぐれた西洋医者を身近に置きたい潘の個人的な意図もあっただろう。当時、西洋医術は広く広州の人々に受け入れられ始めており、パーカーの眼科病院は非常に評判がよく、遠く福建からもやってくる者がいるほどだった<sup>(71)</sup>。潘自身も西洋医療に高い関心を持ち、牛痘の接種を広めることを提唱し、ベンジャミン・ホブソン (1816-1873) が編集翻訳した解剖学と生理学に関する医学書『全体新論』を海山仙館叢書 (1846年) の一つとして刻印している<sup>(72)</sup>。しかし、いくら恩返しととってもそれが大きな問題にならないという判断なしではこの提案はできない。つまり、ここで私たちは少なくとも「望厦条約」締結当時、潘の中で開港場に教会堂や医院を設置することは大した問題ではなく、彼もキリスト教を中国文化への脅威として見なしていなかったことがわかる。

そして清朝中央も最終的にはこれらの條款を認めている。耆英は朝廷への上奏文でこの二つの條款について次のように報告している。

また、貿易開港場で土地を借りて自分たちで礼拝堂および墓地を建設する條款、中国の士人を招聘して方言を学び筆記を手伝わせ、および中国の各項の書籍を購入する條款については、さきに私はこれを退けて不許可としました。[中略] 再び確認すると、礼拝堂と墓地はいずれもアメリカ人が自ら土地を借りて建設するそうですので、頑なに意見を固持し厳しく論駁することは

よろしくないでしょう。ただし、[許すとしても] 禁約として、強引に土地を借り占領したりして輿情に背いてはいけないことを明記すべきです。もし紳民が貸そうとしないなら、アメリカ人もまた口実をつけようがありません。各国が広州に来て二百余年たちますが、中国には文義が少しわかる通事や書吏など、往来をつなぎその助けに役立つ人は少なくありません。各国の記載する各地域の事跡に至っては、漢字が多く、かつ字典、韻府などの本を西洋の文字に翻訳したのも有り、書籍を購入することは前からつねにあったことで、すでに久しく調べようがないです。その要請のとおりにしてもよろしいでしょう<sup>(73)</sup>。

これを受けて軍機処では各条項の妥当性を議論し、中国書籍の購入と中国人の招聘については禁例に抵触するとしながらも決めた条項を軽々しく変更するのはよろしくないとしてこれを許し、地方官に詳細に報告することを義務づけた。礼拝堂の設置については外国人の習俗だからとして許したものの、「でたらめで常理に合わず、[それを] 見聞する者は惑わされやすい。愚かな民は新を好み旧を厭うから真似するかもしれない」から、耆英に各巡撫と相談して出諭し相伝習しないよう沿海住民を管理することを命じた<sup>(74)</sup>。このように、清朝中央も警戒しながらも上記の2条を認めている。医院の設置については軍機処からは何のコメントもなかったが、これは耆英の上奏文に「医院」の2文字が漏れていたからだろう。

「望厦条約」の正式な条約交換は1845年12月31日に潘仕成の海山仙館で行われた。その日付のところには「道光二四年五月一八日、即ち我が主イエスキリスト降誕後紀年1844年7月3日、望厦鈴蓋関防に於いて」とある<sup>(75)</sup>。この紀年の仕方はかなり目を引くのだが、開港場における礼拝堂の設置を認めた理由からして、アメリカの紀年方法を尊重したためであろうことは想像に難くない。ここにも潘らの好意が働いた

う<sup>(76)</sup>。

話を梁廷枏の『耶蘇教難入中国説』に戻す。前にも述べたようにこの説は望厦条約が結ばれてからまもなく完成された作である。おそらく梁廷枏は喪に服しながら条約の交渉経過を注視しその及ぼし得る影響を考えていたのだろう。そして『合省国説』と『耶蘇教難入中国説』を書いてアメリカの国情とキリスト教について紹介し、人々を安心させようとしたのであろう。「望厦条約」の締結過程からわかるように、清朝の官僚の中にはアメリカは恭順であるイメージがあり、また個人的にも宣教師と親交のある者が多く、これらは結果的に条約の中でキリスト教の布教に有利な条項を盛り込むことにつながった。これはキリスト教に対する寛容な態度なしには無理なことである。つまり、梁の、キリスト教は「自存を聴<sup>ゆる</sup>して良い」という表現にみられるような比較的寛容な態度は広東士紳の中で広い基盤を持っていたのである。

## おわりに

以上、本稿では梁廷枏の『耶蘇教難入中国説』を通してアヘン戦争期の広東の知識人たちのキリスト教に対する態度を見てきた。それはおおむねキリスト教に対して仏教と同じく自存に任せて良いという意見だったが、その背後には、アヘン問題と戦争で非難されたイギリスと対照的な、アメリカ人宣教師たちの清朝政府への協力とパーカーの医療活動による西洋医術の受け入れがあった。また、そこには中国文化に対する自負心が大きく働いていた。梁廷枏は典型的な附会論者だったが、このような思想は当時の広東の知識人たちが共通して持っていたものでもあった<sup>(77)</sup>。

梁廷枏のキリスト教に対する理解をみる限り、その理解は非キリスト者としては当時群を抜いていた。アメリカ議会制度の理解をも含めて確

かに「眼を開いて世界をみた」進歩的な知識人ではあった。しかし彼の思想の骨格を成しているのは伝統的な儒教文化と華夷思想で、ヨーロッパ諸国についても中国を中心とした朝貢システムの枠組みの中で考えていた。つまり、伝統的な知識人からの脱皮は果たせなかったのである。アヘン戦争後、西洋諸国の圧迫が強まるにつれて彼の思想は次第に開明から保守に転じ、魏源の「夷の長技を師とし以て夷を制す」に反対するようになっていったが、それはある意味当然な成り行きだったかもしれない。

## 注

- (1) 本稿はキリスト教史学会東日本部会（2021年12月）と中華圏プロテスタント研究会研究定例会（2022年10月）での発表内容をもとにまとめたものである。ここに記してコメントを頂いた方々に感謝の意を表したい。
- (2) 周偉馳「総序」、E.ブリッジマン著・李彬校注『連邦志略』南方日報出版社、2018年、20頁。
- (3) 村尾進「梁廷枏と『海国四説』——魏源と『海国図志』を意識しながら」『中国—社会と文化』第2号、1987年、161頁。
- (4) 茂木敏夫『『海国図志』成立の背景—18-19世紀中国の社会変動と経世論』『東京女子大学紀要論集』64巻1号、2013年、99頁。
- (5) 梁廷枏著・邵循正校注『夷氛聞記』中華書局、1959年初版、1985年2刷、172頁。『夷氛聞記』は梁が自身の経験にもとづきながらアヘン戦争前夜から1849年広東入城問題までの中英アヘン戦争のいきさつを記述した書物である。邵循正によると、琦善や耆英などアヘン戦争で対外的に軟弱な態度を取った高官を批判、暴露したために著者名が記されておらず、序文もない。流布された数も少なく、1959年時点において全国で3部しか所蔵が確認されていないという（同上書、2頁）。
- (6) 戸川芳郎・蜂谷邦夫・溝口雄三『儒教史』山川出版社、1987年、389頁。溝口によると、魏源のアメリカ大統領制に対する紹介は1852年刊の『海国図志』において初めてなされたという。
- (7) 趙春晨「梁廷枏の『耶蘇教難入中国説』」、趙春晨・雷雨田・何大晋著『基

『督教与近代嶺南文化』上海人民出版社，2002年所収。李志剛「対梁廷枏『耶蘇教難入中国説』一文の試析」，同『基督教与近代中国人物』广西師範大学出版社，2012年所収。郭秀文「試論梁廷枏的宗教觀」『江漢論壇』2016年6期。

- (8) 趙春晨等著前掲書，209頁。
- (9) 李志剛前掲論文，27-42頁。
- (10) 郭秀文前掲論文，96-97頁。
- (11) 前掲村尾論文「梁廷枏と『海国四説』」のほか，「『海国四説』の意味」（『東洋史研究』51巻1号，1992年，71-105頁）や「咸豊初年に『夷氛聞記』と『海国四説』を読む——南京条約後，澳門から省城への「西人」の移動が意味すること——」（『史林』97巻1号，2014年，75-108頁）などがある。
- (12) 『伯駕与中国的解放』と『千禧年的感召—美国第一位来華新教伝教士裨治文伝』はそれぞれ，Edward V. Gulick, *Peter Parker and the opening of China* (Harvard University Press, 1973) と，Michael C. Lazich, *E. C. Bridgman, 1801-1861: America's first missionary to China* (E. Mellen Press, 2000) の中国語訳である。
- (13) 以下，梁廷枏に関する紹介は，主に陳沢泓「学問宏博饒壯気—清代愛国学者，史学家，戯曲家梁廷枏」（同『広東歴史名人伝略』広東人民出版社，1998年所収）と，陳恩維「梁廷枏年譜」（同『梁廷枏評伝』人民出版社，2007年所収）に依拠しているが，村尾前掲論文「梁廷枏と『海国四説』」および李穎姿「梁廷枏与林則徐『夷情観』之比較」（『広州大学学报（社会科学版）』3巻4号，2004年），『夷氛聞記』も適宜参照した。
- (14) 「海国四説序」（梁廷枏著『海国四説』中華書局，1993年，3頁）。梁は潮州府澄海県訓導を辞めて広州に戻った翌1842年に母を亡くして服喪している（陳沢泓前掲書，324頁，陳恩維前掲書，254頁）。
- (15) 村尾前掲論文「梁廷枏と『海国四説』」，161頁。
- (16) 陳恩維はこれを1844年刊行としているが，根拠を提示していない（陳恩維前掲書，257頁）。
- (17) 校訂者駱驛の「前言」（前掲『海国四説』，5頁）。
- (18) 「海国四説序」に「道光丙午年正月梁廷枏自序」とある（同上書，4頁）。
- (19) 「海国四説序」，同上書，2-3頁。
- (20) 同上書，1-2頁。
- (21) 同上書，2-3頁。

- (22) 同上書, 4頁。
- (23) 同上書, 5-7頁。
- (24) 梁によると, 年来西洋で毎月発行されている新聞紙が訳されて内地に持ち込まれている。その内容は半数はキリスト教を宣伝するものである。近頃にはまた中国の書を勉強する者が現れ, 自ら入手した『聖書』の要旨に説明をつけてそれを印刷し, 人を遣わして粵東に位置した会城(新会県県庁所在地)の市場で家ごとに配っていたという(同上書, 7頁)。
- (25) 同上書, 8-18頁。
- (26) 同上書, 18-37頁。
- (27) 同上書, 41頁。
- (28) 李志剛前掲論文, 31頁。李は用語の使用からみて梁が参照した聖書はおそらくギュツラフ訳であろうと判断している(38頁)。
- (29) 前掲『海国四説』, 6-7頁。
- (30) 同上書, 41-42頁。
- (31) 以下は筆者が便宜上四つにまとめたものである。
- (32) 前掲『海国四説』, 42-43頁。
- (33) 同上。
- (34) 同上書, 43頁。
- (35) 同上書, 43-44頁。
- (36) 同上書, 5頁。
- (37) 同上書, 45-46頁。
- (38) 「耶蘇天主教」の表記は同書87頁と222頁に見られるが, 後者は『明史』からの引用である。
- (39) 前掲『海国四説』, 126頁。
- (40) 同上書, 114頁。
- (41) 魏源『海国図志』(100巻)27巻, (光緒二年(1876年)涇固道署重刊), 31-32頁。魏源の『海国図志』が梁の『海国四説』に比べて謹厳さに欠けていることは, 趙立人も「梁廷枏及其『耶蘇教難入中国説』」(広東炎黄文化研究会編『嶺嶠文化論集(二)』中国社会科学出版社, 1995年所収, 410頁)で指摘している。
- (42) 校訂者の駱驛によると, 梁書は後世に伝わったものは非常に少なく, 晩近の学術界においても少数の者がたまたま言及しただけで, 1985年での中

国国内の所蔵は広州にわずか3部保存されているだけだという（「前言」, 前掲『海国四説』, 4頁）。

- (43) 趙春晨等著前掲書, 213-214頁。
- (44) 郭秀文前掲論文, 98頁。
- (45) 張汝霖・印光任『澳門紀略』（乾隆十六年刊, 『中国地方志集成』広東府県志輯33, 上海書店・巴蜀書社・江蘇古籍出版社, 2003年）, 32頁。梁は順徳県倫敦の人である。紫泥の具体的な所在は不詳である。康熙年間と乾隆年間に編纂された『順徳県志』の県所轄各都堡村に紫泥は載っていない（広東省地方史志辦公室輯『広東歴代方志集成』広州府部（16）, 嶺南美術出版社, 2007年）。
- (46) 郭秀文前掲論文, 99-100頁。
- (47) 『馬礼遜回憶録』によると、彼は2回アメリカ宣教師の派遣を要求している。1回目は1812年以前にロンドン伝道会に要求しているが、このとき同伝道会からウィリアム・ミルンが派遣された。2回目は1827年にアメリカ教会宛に公開書簡を出している。ちょうどそのとき中国への伝道を計画していたアメリカン・ボードはこれにすぐ応答した。書簡でモリソンは広州に印刷所を設置することも提案し、これに関連して1830年10月アメリカン・ボードはいつ印刷機を送ったほうが良いかと彼に尋ねている（馬礼遜夫人編・顧長声訳『馬礼遜回憶録』広西師範大学出版社, 2004年, 76, 262, 264頁。同書はMrs Elizebeth Morrison, *Memoirs of the Life and Labours of Robert Morrision*, Longman, Orme, Brown, Green, and Longmans, 1839の中国語訳本である）。
- (48) ラトゥレット（Kenneth Scott Latourette）著・雷立柏訳『基督教在華伝教史』道風書社, 2009年, 185頁。アメリカン・ボードに詳しい塩野和夫によると、ボードは設立当初ロンドン伝道会から情報の提供と指導を受けていた（塩野和夫『19世紀アメリカンボードの宣教思想 I 1810-1850』, 新教出版社, 2005年, 28頁）。
- (49) 何大進「略論早期美国赴華伝教士的鴉片貿易観」『歴史教学』1998年第4期, 6頁。
- (50) 同上（6-8頁）。
- (51) これには、清朝側にも当時のイギリスは植民地大国であり、アメリカはイギリスの植民支配から離脱したばかりの国という認識があったことと、

早期中国貿易でアメリカ人商人はイギリス人の排斥と抑圧を受けていたが、そのとき清朝に助けを求め清朝の制定した規制などをよく守り中国人の好感を得たことと関係がある(同上、6頁)。

- (52) *American Diplomatic and Public Papers: The United States and China, Series I-THE TREATY SYSTEM AND THE TAIPING REBELLION, 1842-1860*, Jules Davids, Scholarly Resources, Inc., 1973, p. 5. また Lazich 前掲訳書(181頁)、何大進前掲論文(8頁)を参照した。
- (53) Lazich 前掲訳書, 181頁。
- (54) 「蘭倫偶説序」, 前掲『海国四説』, 104頁。「合省国説序」, 同書, 51頁。
- (55) このことについては、林則徐もごく簡単ながら日記に書き残している。それによるとキングらが告示をみて見学を申し込んだという(『林則徐集日記』中華書局, 1962年, 343頁)。
- (56) Lazich 前掲訳書, 160頁。destruction of the opium at Chunhow (Chinkow), *Chinese Repository*, 1839 (June), p. 76.
- (57) S. W. Williams, 'Recollections of China Prior to 1840', *Journal of North China Branch of the Royal Asiatic Society*, no.8, 1874, pp. 15-16. Frederick Wells Williams 著, 顧鈞・江莉訳『衛三畏生平及書信——一位美国来華傳教士的心路歷程』広西師範大学出版社, 2004年, 59頁(同書は *The life and Letters of Samuel Wells Williams*, New York: G. P. Putnam's Sons, 1888の中国語訳である)。
- (58) 'Letter to the Guéen of England', *Chinese Repository*, Vol. 8, no. 1, 1839 (5), pp.9-12. 書簡の日付は道光19年2月となっている。'Letter to the Guéen of England', *Chinese Repository*, Vol. 8, no. 10, 1840 (2), pp. 497-503. 書簡の日付は道光二〇年一二月九日とある。Lazich 前掲訳書, 160頁。
- (59) 同上書, 162頁。Lazich 書では梁進徳を「梁徳」としている。陳曉明「林則徐訳書与『澳門新聞紙』」(『東南文化』1998年第4期, 114頁)。
- (60) ウィリアムズによると、ブリッジマンにイギリス女王への書簡をエリオット船長に手渡してもらうことを提案したのは梁進徳だったという(S. W. Williams, op. cit. p. 15)。
- (61) Gulick 前掲訳書, 82頁。
- (62) 同上書, 83-84頁。
- (63) 梁碧瑩「第一次鴉片戦争时期的美国对华政策」(『中山大学学报(社会科学

- 版)』1991年第1期, 106頁)。Lazich前掲訳書, 191-192頁。
- (64) 王鉄崖『中外旧約章匯編』第1冊, 三聯書店, 1957年, 54頁。
- (65) Lazich前掲訳書, 202頁。
- (66) Cuilick前掲訳書, 295頁。George B. Stevens and W. Fisher Markwick, *The Life, Letters, and Journals of the Rev. and Hon. Peter Parker, M. D., Missionary, Physician, and Diplomatist, The Father of Medical Missions and Founder of the Ophthalmic Hospital in Canton*, First published in 1896 by the Congregational Sunday-School and Publishing Society, Boston and Chicago, Reprint edition published in 1972, p. 254.
- (67) 潘仕成については, 主に王元林・林杏容「近代大變局中の紅頂行商潘仕成」(『中国与周辺国家關係研究』2009年9月, 291-304頁), 邱捷「潘仕成的身分及末路」(『近代史研究』2018年6期, 111-121頁), 陳沢泓「鏤成書苑千家石—清代富商潘仕成」(陳沢泓前掲書, 348-356頁), 陳沢泓「潘仕成略考」(広東炎黄文化研究会編前掲書, 68-76頁)を参照した。
- (68) 「耆英又奏肇慶知府趙長齡即補道潘仕成調署襄理夷務片」(道光二四年六月三日付), 『籌辦夷務始末: 道光朝』第6冊, 卷72, 1963年, 2830頁。
- (69) Cuilick前掲訳書, 295頁。
- (70) Stevens and Markwick前掲書, p. 328
- (71) 茂木敏夫前掲論文, 95頁。
- (72) 前掲陳沢泓「鏤成書苑千家石—清代富商潘仕成」, 351-353頁。劉沢生「合信的『全体新論』与広東士林」(『広東史志』1999年1期, 55頁)。
- (73) 「耆英又奏與美使商定条約三十四款摺」(道光二四年六月一四日付), 『籌辦夷務始末』第6冊, 2843-2844頁。
- (74) 「穆彰阿等奏覆議耆英等所定美利堅國貿易修約摺」(道光二四年七月二日付), 同上書, 2849-2850頁。
- (75) 王鉄崖前掲書, 57頁。
- (76) 条約交渉のとき, カッシングは清朝皇帝に直接国書を渡したいことを申し出, これを交渉でアメリカに有利な条件を引き出すために利用したとするが, それが具体的にどのような条件を引き出せたかについては要検証である。
- (77) 村尾前掲論文「梁廷柅と『海国四説』」, 171頁。